ここで紡がれた時の記憶に逢いに行く。

TOKI・NO TABI

The millennium roman

時の旅

大分県
豊の国千年ロマン観光圏
別府・中津・宇佐・豊後高田・国東・杵築・日出・姫島

ボランティアガイドと一緒に豊の国千年ロマンを歩きませんか。

ボランティアガイド問い合わせ一覧

神代	姫島村	**とっておきのひめしま村歩き** 問 姫島観光LLP　島の風　☎0978-87-3505(まるい商事) 実施日／調整可(平日のみ・要予約)　料 大人500円【要予約】
神代	宇佐市	**神仏習合の里散策** 問 宇佐市観光協会 ☎0978-37-0202 実施日／調整可(要予約)　料 大人650円
古代	国東市	**国東市観光協会公認ガイド「国東旅ナビゆめ友遊」** 問 国東市商工観光課　☎0978-72-5168 実施日／予約日に実施　料 半日4,000円、1日8,000円
古代 中世	豊後高田市	**田染観光ガイドの会** 問 豊後高田市商工観光課　☎0978-22-3100 実施日／毎日(要予約・最少人数5名)　料 一人200円
近世	杵築市	**杵築城下町散策** 問 杵築市観光協会　☎0978-63-0100 実施日／毎日(7日前までに要予約) 料 無料(ただし別途施設入館料が必要)
近世	中津市	**城下町中津史跡めぐり** 問 中津耶馬溪観光案内所　☎0979-23-4511 実施日／毎日(1週間前までに要予約) 料 無料(ただし別途施設入館料が必要)
近世	日出町	**ひじ　ふれあいまち歩き** 問 日出町観光協会　☎0977-72-4255 実施日／毎日(要予約) 料 ガイド一人につき1,000円(ただし別途施設入館料が必要)
近代	別府市	**別府八湯ウォーク(14コース)** 問 (社)別府市観光協会 平日☎0977-24-2828、土日祝☎0977-24-2838 実施日／コースにより異なる　料 コースにより異なる
近代	豊後高田市	**町歩き案内人** 問 豊後高田市観光まちづくり株式会社　☎0978-23-1860 実施日／毎日(インターネットのFAXご予約フォームより要予約) http://www.showanomachi.com/yoyaku/ 料 ガイド一人につき2,000円 (ただし別途施設入館料、駐車料金が必要)

スマホでもっと楽しく歩こう!

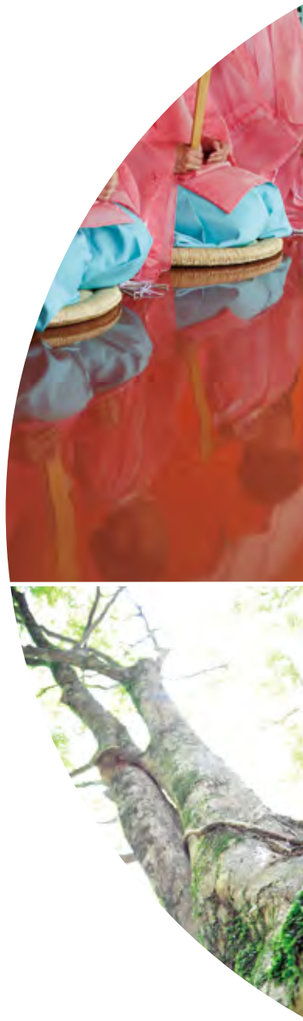
スマートフォンのアプリ「Layar」を使えば、
各地でボランティアガイドによる動画案内をご覧いただけます。

①「Layar」を起動し「大分県」で検索して「大分県北部・観光情報」コンテンツを選択します。
②カメラが起動し、周囲の観光情報がアイコンで映し出されます。
③アイコンをタップすると詳細情報を確認するボタンやルート案内などのアクションを選択できます。

日本一のおんせん県おおいた 味力も満載

大分県 豊の国千年ロマン観光圏
〒874-8511 大分県別府市上野口町1-15(社団法人別府市観光協会内)
TEL.0977-24-2828
http://www.millennium-roman.jp/

千年ロマン　検索



豊の国千年ロマン
それは、ここで紡がれた千古のストーリー

遠い昔のことを知る、それは未来を知ること―。
神代（かみよ）から古代、中世、近世、近代の5つの時代、
千年を超える時空の旅にその答えは刻まれている。
ここで生きる人々によって大切に守られてきた、
脈々と紡がれる日本の記憶に、時を超えて逢いに行こう。

TOKI • NO TABI
The millennium roman

contents

04 神代 神代の島[姫島]
06 神代 神代の杜[宇佐神宮]
10 古代 山の寺[国東半島]
12 古代 里の寺[国東半島]
14 中世 荘園の村[田染荘]
16 近世 坂の城下町[杵築]
18 近世 学びの城下町[中津]
20 近世 海の城下町[日出]
22 近代 温泉文化の街[別府]
26 近代 昭和の町[豊後高田]
29 この味に逢いたい
― 千年ロマングルメ ―

access

飛行機

東京（成田）	約2時間	大分空港
東京（羽田）	約1時間35分	大分空港
名古屋（中部）	約1時間5分	大分空港
大阪（伊丹）	約1時間	大分空港

JR

東京	約5時間40分	別府
名古屋	約4時間	別府
新大阪	約3時間30分	別府
博多	約1時間50分	別府
熊本	約2時間40分	別府
鹿児島中央	約3時間40分	別府

東京	約5時間50分	杵築
名古屋	約4時間10分	杵築
新大阪	約3時間25分	杵築
博多	約1時間40分	杵築
熊本	約2時間30分	杵築
鹿児島中央	約3時間30分	杵築

東京	約5時間40分	宇佐
名古屋	約4時間	宇佐
新大阪	約3時間10分	宇佐
博多	約1時間35分	宇佐
熊本	約2時間25分	宇佐
鹿児島中央	約3時間10分	宇佐

•東京～、名古屋～、新大阪～は小倉乗り換え　•博多～はソニック直通　•熊本～、鹿児島中央～は博多で九州新幹線からソニックに乗り換え

大分空港接続交通機関　大分空港バス案内所 TEL.0978-67-1198

●空港特急バス（エアライナー）

空港	約19分	杵築 690円
空港	約27分	日出 1,050円
空港	約45分	別府 1,450円
空港	約65分	大分 1,500円

●県北快速リムジンバス（ノースライナー）

空港	約97分	中津 1,500円
空港	約58分	宇佐 1,500円
空港	約50分	豊後高田 1,350円

フェリー

●スオーナダフェリー TEL.0978-84-0114

徳山（山口県）	約2時間	竹田津（国東市）

●フェリーさんふらわあ
コールさんふらわあ 0120-56-3268

神戸	約11時間20分	大分
大阪	約11時間50分	別府

●国道九四フェリー TEL.097-575-1020

三崎（愛媛県）	約1時間10分	佐賀関（大分市）

●宇和島運輸フェリー TEL.0977-21-2364

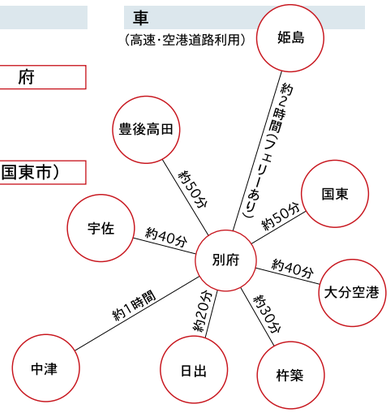
八幡浜（愛媛県）	約2時間50分	別府

●姫島村営フェリー
（姫島村役場船舶課）TEL.0978-87-2012

姫島村	約20分	伊美（国東市）

車

（高速・空港道路利用）



時の旅へと出かけよう

そこには千年以上の時が流れている―
神々と御仏が導く、時間旅行
時を超えた人々の想いや日本の文化に出逢う
豊の国千年ロマンの始まりです
まずは、時空の旅の入り口
神代の姫島へご案内しましょう

神代の島 姫島

お姫様が見守る、心温かき島

姫島村は、国東半島からほど近い。国東市の伊美港からフェリーに乗り、船の甲板に出ると、すぐそこに姫島が見える。これからあの場所へ渡ると思うと、子どもの頃の遠足のようにワクワクしてくる。いよいよ、神話が眠ると言う神代の島の旅が始まる。

約20分で姫島へ到着。観光ガイドの東さんが元気な笑顔で「よく来たね！」と出迎えてくれた。さっそく、姫島の海岸沿いをドライブしながら、島について教えてくれた。

青い瀬戸内海に抱かれた姫島は、ロマンに満ちた伝説の島である。古事記によると、イザナギとイザナミの二人の神から「姫島」は生まれたと伝えられている。また姫島の伝説を語る時、7つの謎が残る「姫島七不思議」を抜きには語れない。「なんで姫島っち名前なんか、知っちょる？ これ

姫島ボランティアガイドの東澄子さん。お孫さんが6人いるとは思えない、若々しい笑顔がチャームポイント。まるで前から知り合いだったような温かみのある案内が名物。姫島港前にある「東みやげ店」を切り盛りする。

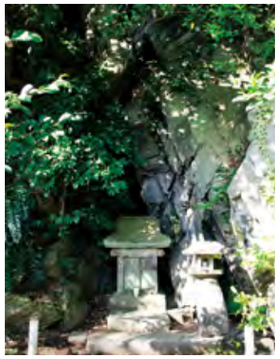
から案内する場所でわかるけんね。」東さんは、初対面でも、ずっと知っている間柄のように親しく話してくれる。島の人たちの人柄が見える会話が心地いい。

お姫様に会いに行こうね、と言われて向かったのは「比売語曽社（ひめこそしゃ）」という小さな神社。その昔、韓国の王子さまが、白い石から生まれた美しいお姫様に魅かれ、求婚した。しかし、お姫様は王子から逃れ、島にたどり着き、比売語曽の神になったと日本書紀に記されているという。これが「姫島」の名の始まりだ。「比売語曽の神様は女性を応援してくれる神様。だけん姫島の女性は強いんで。」と、東さんが豪快に笑う。お堂の奥には、雨風を避けるように岩場の間に挟まった小さな祠があった。数年前に見つかったという祠の近くで、不思議とぴたりと風が止んだ。神代の島というだけあって、神の存在を信じたくなる。

このお姫様、島のいろんなところに足跡を残していて、それが姫島七不思議になっている。手をたたくと湧いたという「拍子水」や、「逆さ柳」「かねつけ石」も比売語曽のお姫様の言い伝えだ。

姫島といえば、毎年8月のお盆に行われる、伝統的な盆踊りが有名。「お盆は帰省する人と、観光の方と多くてね、島がちょっと沈むんよ。」姫島ジョークも飛び出す。代表的なキツネ踊りは、姫島の北の端にある北浦という地域に住んでいる子どもたちだけが踊ることができる。

小さな島だと思い込んでいたが、来てみると見どころは多い。エメラルドグリーンの美しい海、島に88カ所あるお大師様、春と秋に飛来する渡り蝶のアサギマダラ、150万年前の地層や化石など…。素晴らしいのは場所だけではない。「姫島は、約2千人ほどが暮らす小さな島だけど、村民みんなが温かいことが自慢だね。近所の人とのつながりも深い。漁師さんがとった新鮮な魚を分けてくれて、そのお礼に野菜をお返しする。そんなシェアの暮らしが姫島らしさかな。島の外から来てくれる人も、一度会った人はもう親せきやね。」と、東さん。ここに流れているのは、ゆったりとした島時間。明日へ向かう勇気と元気をもらいに、また「ただいま」と帰りたくなる。



女性の味方「比売語曽社」。二礼二拍手一礼してお参り。恋愛成就・縁結びの神様。

拍子水は24.9℃の冷泉。比売語曽のお姫様が口をゆすぐ時に水が無く、天にお祈りして手をたたくと湧いたという。飲むとしゅわっと鉄分の強い味。隣には温泉も。

債鬼（さいき）に追われた善人を千人かくまったといわれる「千人堂」には、全国でも珍しい黒曜石の地層が露出している。昭和34年には県の天然記念物に指定。

「下関の馬関戦争の時、イギリスやドイツの黒船が停泊して、ここで密談をしたのよ。」そんなロマンあふれる話を、千人堂に行くところどころにある看板を見ながら説明してくれる。

活き・味の良さが全国でも定評のある姫島車えび。かつて塩田だった場所を養殖池とし、姫島では重要な産業となっている。「昼寝て夜に活動するえびに合わせて、漁師も夜型の生活をしているんよ。」と東さん。

数十種類ものめずらしい踊りが踊り継がれる、姫島盆踊りの一つ、「キツネ踊り」。真っ白なキツネに扮した子どもたちがおもしろいしぐさでかわいらしく踊る。

問 姫島村水産・観光商工課
☎0978-87-2111
http://www.himeshima.jp

ボランティアガイド
とっておきのひめしま村あるき
姫島観光LLP　島の風
☎0978-87-3505（まるい商事）
実施日／調整可（平日のみ・要予約）
費用／大人500円要予約

千年ロマンのルーツを歩く

ここは、全国に約4万ある八幡社の総本宮
大鳥居をくぐれば、一瞬にして清々しい
朱色と杜の緑が眩しい光に包まれて

宇佐神宮の神官（じんかん）と国東半島の僧が一緒に法華経をあげる「法華三昧（ほっけざんまい）」。宇佐神宮の神宮寺・弥勒寺があった当時の様子を再現したかのよう。

神代の杜 宇佐神宮

神代から古代へ、じっくりと宇佐詣

神代の舞台は、姫島から宇佐へと続く。JR宇佐駅からバスに揺られて約10分。広大な敷地に杜が広がる宇佐神宮が見えてくる。

駐車場で、観光ボランティアガイドの佐藤さんと待ち合わせ。佐藤さんは宇佐の歴史のスペシャリストだ。「宇佐神宮は見ごたえのある、千年ロマンの中で重要なカギを握る場所ですから、じっくり歩きましょうね。」と案内がスタートした。

宇佐市観光ボランティアガイドの佐藤稔明さん。ガイド歴16年の大ベテランで、歴史はもちろん、自然に至るまでありとあらゆる宇佐神宮の情報を網羅。史実に基づいた宇佐神宮の歴史を紐解きながら、神代から古代を案内してくれる。元教師だからこその分かりやすさに定評あり。

駐車場から売店が並ぶ仲見世通りを過ぎ、砂利道をざくざくと歩く。佐藤さんが宇佐神宮の歴史について語ってくれた。「神代の時代、宇佐の地に降臨したという伝説が残る八幡神を祀ったのが、この宇佐神宮です。国難のたびに神威を発揮し、国家と朝廷を守り、伊勢神宮と並ぶ国家神として、重要な地位に置かれていました。それ以降、全国各地に宇佐八幡の分霊を祀った4万もの八幡社が造られ、宇佐神宮は全国の八幡神の総本宮となったのです。全国の歴史との絡みが多くてね。特に奈良時代が大きな舞台だったんですよ。」落ち着いた口調で、歴史的なこともわかりやすく伝えてくれる佐藤さん。元教師というから納得だ。

宇佐神宮の歴史を聞いていると、朱色の神橋が見えてきた。神橋を渡ると、鮮やかな朱色の大鳥居が出迎え、その先の参道が遠く杜の入り口へと真っすぐに延びている。まるで神の世界に足を踏み入れたような感覚だ。広大な境内には川が流れ、2つの池があり、国宝をはじめ国の重要文化財も展示されている。宝物館や能楽堂、そしてたくさんの社殿がある。広々とした空間は、国家神としての神威の強さを物語る。

八幡さまの杜へ

手水舎でけがれを清め、神域の奥へと進む準備を整える。歩みを進めると、上宮と下宮へと分かれる鳥居が二つ。上宮への階段を上ると、その一帯を天然記念物のイチイガシが生い茂る。まるで神宮を守るかのように。ここはまさに神の領域。吸い込む空気でさえ、異次元のもののような気がする。佐藤さんいわく、「早朝に訪れると、特に神聖な気分が味わえますよ。雨のお参りもまたいい。いつになく厳かな表情をうかがうことができます。ししとと石畳に雨がしみる音が、神様のつぶやきのようにも聞こえるんです。」立ち止まって胸いっぱいに深呼吸する。「清々（すがすが）しい」とはまさにこの場所のことだ。

杜を抜け、上宮へたどり着く。国宝である本殿、一・二・三之御殿を囲む、宇佐神宮を象徴する建造物の一つ、南楼門が目に入る。宇佐神宮の本殿は、八幡造りという建築様式で、屋根が特徴的。檜（ひのき）の皮を重ねて造られた檜皮葺（ひわだぶき）と呼ばれる。見上げるとその重厚感は何とも言えない。

拝殿の前に立ち、「二拝四拍手一拝」という全国でも珍しいお参りの仕方で、神様に手を合わせる。かつて、最澄や空海も航海の無事を祈って宇佐を詣でたという。八幡様は、昔も今も変わらず開運・必勝祈願の神様として信頼が厚い。最後のひと押しで、三之御殿の前にある御神木の大楠に両手をあてて、願い事をする人も多い。

朝6時半ごろ、お勤めに上宮へ向かう巫女さんたち。神が目覚める時間。

広大なイチイガシの杜を抜けると目にも鮮やかな朱塗りの檜皮葺（ひわだぶき）社殿が姿を現す。新緑の時期は森林浴がおすすめ。

宝物館前にある「初沢の池」。奈良の猿沢の池、京都の広沢の池と並び、日本の三沢の池の一つになっている。6〜7月に見事な蓮の花が咲き誇る。

上りとは違う道順を下り、下宮へ。さらに下宮から左へ進むと、モミジが色濃く広がる場所があった。そこには「弥勒寺跡」と書かれた案内図。「宇佐神宮の歴史の中でも山場となった奈良時代、神仏習合の起源であるお寺があった場所です。今はただ、静かに礎石が残るのみ。ここにあった仏像は、宇佐神宮の近くにある極楽寺で保存されているので、今でも見ることができますよ。」と佐藤さん。

「神社の中に、お寺があるというのは、特別なこと。宇佐神宮は、神仏習合をいち早く進め、国東半島を中心とした六郷満山文化の発展に大きな影響を与えました。神仏習合発祥の地と言われています。」

今はただ、広い場所が残るだけの弥勒寺跡。当時はたくさんの僧が修行を行っていた。

「二拝四拍手一拝」で一・二・三之御殿に手を合わせよう。

頂上に八幡神が初めて降臨したと言われる「御許山（おもとさん）」を上宮から眺める。宇佐神宮の奥宮である神体山をここからもお参りすることができる。

弥勒寺跡からの帰り道、神官（じんかん）と僧が一列に並び、参道を歩く姿が見えた。赤や青、ピンクと、美しい衣をなびかせながら歩く様は、さながら古代絵巻のようだった。それは「法華三昧（ほっけざんまい）」という、年に数回行われる神と仏が一緒にお参りする法要だという。「古代に、弥勒寺にいた僧たちは、やがて国東半島の山々を修行の場とし、それが神仏習合の六郷満山文化へと発展しました。この法華三昧は、六郷満山文化ならではの風景ですね。当時もこんなふうに神官と僧が一緒にこの宇佐神宮にいたのでしょう。」古代に瞬間移動したかのような、なんとも不思議なひとときだった。

駐車場までの帰り道、仲見世通りには宇佐ならではのおみやげ屋さんが並ぶ。中でも「宇佐飴」は上宮に祀られる応神天皇にちなんだエピソードも。ほおばると、どこか懐かしい、ほんのり優しい味。宇佐名物の味一ねぎがたっぷり入った「ねぎ焼き」もおすすめだ。「シャキシャキで甘みがあるのが味一ねぎの特長ですね」と、お店のお姉さんの言葉通りの味わい。境内を歩き回ったあとの小腹を満たしてくれた。

「宇佐神宮は知れば知るほど神秘的で、謎ばかり。次いらっしゃるときは、ぜひ周りの弥勒寺ゆかりのお寺を一緒に歩きましょう。」帰り際、佐藤さんが声をかけてくれた。

今日はかなりの距離を歩いた。だけど、帰り道の足取りは軽い。歩くだけで心が爽快感で満たされた。季節ごと、一日の中でも、いろんな表情を見せてくれる。何度来ても面白い。そして奥深い千年ロマンのルーツにふれられる場所だ。

問 宇佐市観光まちづくり課
☎0978-32-1111
http://www.city.usa.oita.jp

ボランティアガイド
神仏習合の里散策
宇佐市観光協会　☎0978-37-0202
実施日／調整可（要予約）
費　用／大人650円

菱形池（ひしがたいけ）のそばにある御霊水（ごれいすい）前で。「年間絶えることなく湧く霊水は、神宮の祭典には必ずお供えされているんです。」

上宮にあがる手前、若宮神社横あたりの石畳にある「夫婦石」。恋愛成就に効くという。

見どころ

千年ロマンを知りたい人は まず“レキハク”へ

大分県立歴史博物館

宇佐・国東半島を中心に、県内の歴史と文化を学べる博物館。古代仏像文化や六郷満山文化、宇佐八幡文化など時代ごとに当時の様子がわかる貴重な資料を展示。

☎ 0978-37-2100
所 宇佐市大字高森字京塚
営 9:00〜17:00
休 月曜

宇佐神宮のすぐそば 弥勒寺ゆかりの寺を訪ねて

極楽寺

宇佐神宮の神仏習合の歴史を知る上でも非常に重要なお寺。弥勒寺講堂の本尊だった県指定有形文化財「弥勒菩薩坐像」を安置。事前連絡すると、住職さんが丁寧に案内してくれる。

☎ 0978-37-0407
所 宇佐市大字南宇佐 2176

古代

心を磨く、自分をみつめる 祈りの時

懐深く山の寺で包み込まれる
今も昔も変わらない、それは自分探しの旅路

朱色の太鼓橋を渡った先に見える、両子寺仁王像と山門。

古代 山の寺 国東半島

深山に花開いた六郷満山文化

奈良時代、宇佐神宮の神宮寺である弥勒寺は、僧侶の数が増え、修行するには手狭になった。そこで新しい修行場として選ばれたのが国東半島である。

傘を開いたような形をした国東半島は、伊予灘、周防灘に囲まれ、半島の中心に近づくにつれ、岩肌がむき出しになった荒々しい山々が連なる。その中央にそびえる国東半島最高峰の両子山から、放射状に延びる谷筋に沿って、安岐、武蔵、国埼、伊美、来縄、田染の6つの郷にわたって開かれた寺々を総称し、「六郷満山」と呼ばれる。神を仏とし、仏を神とする、神仏習合発祥の地である宇佐神宮から訪れた僧侶たちにより、国東六郷満山文化が花開いた。

その中でも両子山の麓にある六郷満山の総持院、両子寺へお参りに出かけた。

両子寺は、双子の神様を祀る天台宗の寺。今から約1300年前に宇佐八幡神の化身である仁門菩薩によって開かれたと言われている。

参道を目の前にして、思わずため息がこぼれる。筋骨隆々とした、たくましい体つきに、端整な顔立ちの仁王像がどっしりと構える。その背後には苔むした趣ある石段、山門と、その佇まいがなんとも美しい。

自然林に囲まれた境内には、護摩堂や書院、稲荷堂、奥の院などの建造物や、仁王像をはじめ、国東独特の国東塔など、石造物がある。また、境内は瀬戸内海国立公園内に含まれ「全国森林浴の森百選」に指定されている。広々とした境内をじっくり歩いて、心を込めてお参りを済ませたところで、法嗣の寺田豪淳さんに、六郷満山の歴史を尋ねた。

「六郷満山は、宇佐八幡との関わりと、さらには博多からの遣唐使の通り道であったため、仏教など中国からの文化がいち早く入ってきました。さまざまな文化が混ざり合い、発展を遂げたんでしょうね。」

両子寺をはじめ、『三人寄れば文殊の知恵』で知られる文殊仙寺など、国東半島では岩山と一体化した奥の院が多く見られる。寺と自然の調和も、六郷満山の見どころの一つだ。

「10年に1度、僧侶が山の中に入り、自然の中で霊力をつける"峯入り"という特徴的な伝統行事があります。国東の自然が修行に適していたんでしょう。」峯入りは僧侶だけではなく、一般の人も参加可能だ。ひたすら険しい山道を歩き精進を深める修験者を、里人が温かく迎えてくれる。千年以上経った今も、信仰心は変わらずここにある。

寺の中に神社があるというスタイルが神仏習合の象徴。この「六所権現」は六郷満山の各寺が鎮守神として寺の敷地内に祀られている。

両子寺法嗣　寺田豪淳（ごうじゅん）さん。大学卒業後、アメリカでの布教活動を経て、生まれ育った両子寺へ戻る。トレッキングやスキューバダイビングが趣味というアウトドアな一面を持つ。

自然の未知なる力を味方につける

日々のお勤めに加え、国東半島の自然を守り、子どもたちに自然と文化を伝えるさまざまな体験を提供する活動を行う寺田さんには一つの思いがある。

「六郷満山は、自然林と岩山があり、そこにお堂があり、祠がある。かつて僧たちが修行を積んだこの場所は、現代の私たちにとっても心を磨く場所。寺をめぐり心を清め、山々を歩いて山と海の大パノラマに感動し、路傍の石仏や石塔は安らぎをくれる。子どもから大人まで、自分の足で歩いて、ここでしか感じることのできないものを見つけ、自分磨きの時間を過ごす。普段と違う環境に身を置いてリフレッシュする、『リトリート』する場所として皆さんを広く受け入れていきたいですね。」

そんな時間が過ごせるコンテンツの一つとして、「国東半島峯道ロングトレイル」での山歩きが、2013年夏に一部スタートする。

弥勒寺の僧たちも同じ気持ちで、この六郷満山で修行を重ね、自分磨きをしていたのかもしれない。参道を下り、歩いていると、参拝客の方がこんな話をしているのが聞こえた。「ここには、まだこんな懐かしい風景が残っているんだねぇ。」

目の前には、心のふるさとが広がっていた。

見どころ

山岳仏教の起源を歩く
峯入り
六郷満山の僧侶が結集して行われる、1300年続く山岳仏教修験行事。10年に1度、6日間かけて各霊場をめぐりながら、約150km歩き、仁門菩薩の足跡をたどる。近年では2010年に行われた。

春の訪れと幸福を運ぶ鬼
修正鬼会
「オーニワヨー、ライショハヨー」の掛け声とともに、燃える松明を振りまわしながら鬼が境内を走り回る、幸福を呼ぶ行事。豊後高田市では天念寺で毎年、国東市では岩戸寺と成仏寺で1年交替に行われる。国指定重要無形民俗文化財。

問国東市商工観光課
☎0978-72-5168
http://web.city.kunisaki.oita.jp

問豊後高田市商工観光課
☎0978-22-3100
http://www.city.bungotakada.oita.jp

ボランティアガイド
国東市観光協会公認ガイド「国東旅ナビゆめ友遊」
国東市／両子寺、文殊仙寺など
☎0978-72-5168（国東市商工観光課）　実施日／予約日に実施
費用／半日4,000円、1日8,000円　予約／要

古代（里の寺）国東半島

うるわしき御仏のほほえむ里

じっと静かに見つめていたい表情がある

変わらないけれど、新たな発見に心が躍る

ほらきっとゆっくり、あなたの心がほぐれていく

憧れの聖地

なだらかな丘陵で、牧歌的な里風景が広がる西国東。宇佐神宮が重要視したこの場所は、かつて本山・中山・末山と寺々が分けられていた。ゆえに〝仏の里〟と呼ばれる。豊後高田の富貴寺で、観光ガイドの綾部栄徳さんと待ち合わせた。「素晴らしい場所がたくさんあるので、ぜひゆっくり見てくださいね。」

まずは、富貴寺大堂へ。「ここは、あの世に行った後、阿弥陀様に極楽浄土へ連れて行ってください、と祈願するために造られた寺です。」と綾部さん。目の前に現れた大堂は、やわらかな屋根の曲線、瓦には仏様の彫刻。一寸のくるいもないシンメトリーの均整美。

「この建物は、今から800年ほど前に建てられました。富貴寺は、宇佐神宮の大宮司家一族の氏寺です。平等院鳳凰堂、中尊寺金色堂と並んで日本三大阿弥陀堂と言われ、九州最古の木造建築として国宝に指定されています。とびきり腕のいい大工さんが手がけたんでしょう。当時、富貴寺は宇佐神宮の人しか拝むことができなかった。だからここは、みんなの憧れの場所だったんです。」簡素な造りが醸し出す美しさ、富貴寺は平安時代を代表する木造建築物である。

富貴寺大堂の阿弥陀如来坐像

豊後高田市ボランティアガイドの綾部栄徳さん。現役時代は理数の教師だったという。定年退職後、豊後高田市文化財調査委員を経て、現在は特に田染地区に力を入れてガイドをしている。

この日はお天気に恵まれ、大堂の扉が開いていた。「何回も通ってやっと会える。今日は運がいいなぁ。」綾部さんがほほえんだ。奥には、ふっくらとやわらかな表情をした木造の阿弥陀様が静かに坐していた。「まず阿弥陀様の前にお座りください。」立って見た時は、阿弥陀様が目を閉じているように見えたが、座って正面から向き合うと、薄く開いた優しい目でこちらを見ている。心と心で会話をする。この仏像は国の重要文化財に指定されている。「壁をご覧ください。極楽浄土が描かれています。横が2・75m、高さ1・75m、平安期のものでこれだけ大きな壁画は日本にここだけ。当時はきらびやかな極彩色でしたが、時が経つにつれて褪色していきました。少しでも維持するために、今は天気の悪い日は大堂の扉を開かないようにしています。造られた当時のものを再現したレプリカが、宇佐市にある大分県立歴史博物館に展示しています。」（9ページでご案内）

大堂と阿弥陀如来坐像は、1本のカヤの巨木から造られたという伝説がある。こんな立派なお堂を建てたにもかかわらず、さらに材料が余ったため、富貴寺から一山越えたところにある熊野磨崖仏の下にお寺を建てようというから、どんな大木だったのか。その余材を載せるための牛を造ったが、途中で牛が動かなくなり、そこで仏様を彫った。その仏様を祀るために造ったのが真木大堂である。

伝説に導かれるままに、真木大堂を訪ねた。

民の願いを今に伝える

国東半島には、石造の仁王像をよく見かけるが、真木大堂には、この辺りでは珍しい木造の仁王像が佇む。昔は茅葺の本堂に仁王像はあったそうだが、250年前、建物の老朽化に伴い仏様を守るために、地区の農家がお互いに少しずつお米を出し合い再建したという。

「ゆっくりと仏様を拝むといいですよ。」大きな仏像から放たれるとてつもないパワーに、一瞬息が止まる。圧倒的な存在感、繊細な彫りの一つひとつが生みだす生きた表情、目を合わせたまま、そこに立ちつくす。

真ん中に阿弥陀如来、両側に不動明王と大威徳明王が並ぶ。この配置は、非常に厳しい修行の場であることを証明している。「正式には『真木大堂馬城山伝乗寺』と言い、仏像の本質を伝える寺だったんです。」真木大堂は六郷満山65ヵ寺のうち本山本寺として、三十六坊の霊場を有した最大の寺院だった。「特に、この牛に乗った大威徳明王は、地域のお百姓さんたちにとっ

秋には一面に黄金色のイチョウのじゅうたんが敷き詰められ、富貴寺大堂が輝いて見える。

真木大堂阿弥陀如来と四天王
真木大堂の収蔵庫には、宇佐神宮の圧倒的な財力で築いた国宝級の仏像が神々しく並ぶ。

九州に残る密教彫刻の大作である真木大堂大威徳明王。

千年の時を刻む田園風景

先人の英知と恵みの結晶が
時代に流されることなく残った
まさに時を超えた風景遺産

中世 荘園の村 田染荘

宇佐神宮が大切にした美田

て、昔からとても大切な存在。」大威徳明王の前にあるお札を、牛小屋や納屋に貼っておくと一年牛が元気で過ごせるという。真木大堂は人々の生活に根ざした信仰の象徴だった。

宇佐神宮の宮司が心の拠り所として造った里の寺。ここには神と仏を超えた、心のつながりが時を経てなお結ばれている。案内をしてくれた綾部さんは、富貴寺の阿弥陀様の前では帽子を取って一礼し、この真木大堂の仏像の前でも同じようにふるまう。折り目正しく敬う心が、当時の里人の思いと重なって見えた。

「すぐ近くに、中世の荘園が今でも残っている場所があるんですよ。行ってみましょう。」古代から中世へ、時代を飛び越える。

見どころ

熊野磨崖仏

日本最大級の大きさを誇る2つの巨大な磨崖仏は、国指定重要文化財と国指定史跡に指定される大分県を代表する磨崖仏。平安時代から鎌倉時代前期の作といわれる。

☎0978-26-2070
所 豊後高田市田染平野

真木大堂から車で少し進む。ここは、六郷のうちの一つ、田染地区。くねくねと曲がった田舎道が続く。「見てごらん、ここは、田んぼの形に合わせて道が造られているんだよ。」

田染の小崎地区にある、「ほたるの館」に車を停め、そこから田染の風景を見渡した。目の前には、昔話に出てくるような田んぼが一面に広がる。田んぼ一枚一枚の形が違い、あぜ道が美しい曲線美を描いている。まるで緑色のパズルをはめ込んだようだ。「ここも富貴寺と同じように、宇佐神宮が大切にした場所です。」

中世荘園村落遺跡「田染荘」では、1980年頃、全国で圃場整備事業が進む中、小崎地区の土地について5年かけて調査し、800年前の集落と水田の姿、屋敷跡、史跡などが現在まで形を変えることなく継承される、日本でも数少ない貴重な遺産であることがわかった。

「田んぼの上の方に鳥居が見えるでしょう。あそこは雨引社と言って、その向こうの西叡山から出る地下水を利用して田んぼを一枚一枚開いていったんですよ。土地の高低差などを利用してそれぞれの田に水がいくようにしたから、全部違う形の田になったんです。」複雑な形の田は、当時の知恵と技術によってつくられていた。

743年、墾田永年私財法の成立で、一面がうっそうとした原野を水田地帯にすることになった。開墾された水田は、宇佐八幡宮が支配する荘園となり、最も重要視された。なぜ宇佐八幡宮がこの田染荘を大切にしたのか。

「雨引社のある地区を赤迫というんですが、赤迫というだけあって、赤土だったんです。赤土から獲れる米は大変質がいい。田染のお米を宇佐神宮の神官さんが食べたり、神様にお供えしたりしていたんじゃないでしょうか。」宇佐神宮は、10世紀から11世紀にかけて、藤原道長などの権力者と手を結び、九州全域に荘園を拡大し、九州の3分の1を所有する大領主となった。

そんな800年前の荘園の姿を守っていこうという取り組みが認められ、2010年には、田染荘小崎地区が国の重要文化的景観という、いわゆる"景観の国宝"に選ばれ、さらに2011年には「日本ユネスコの未来遺産」に登録された。

時代が変わっても、この小崎の荘園は中世の頃の姿を今に色濃くとどめる。その中で、春には梅や桃の花が咲き誇り、夏は御田植祭という伝統行事を模した田植え体験や、ホタル観賞会、秋には収穫祭も開かれる。ゆっくりと過ごせる農家民泊も人気だ。「この景色をこれからも引き継いでいきたいという思いは増すばかり。最近は、都会からもたくさん人が来てくれるようになった。一緒に守っていけたらと願うばかりです。」四季折々に中世荘園を体感できる山村は、800年前も同じようにやすらぎとにぎわいに満ちていたに違いない。

問豊後高田市商工観光課
☎0978-22-3100
http://www.city.bungotakada.oita.jp

ボランティアガイド
田染観光ガイドの会
☎0978-22-3100（豊後高田市商工観光課）
実施日／毎日（要予約・最少人数5名）
費　用／一人200円

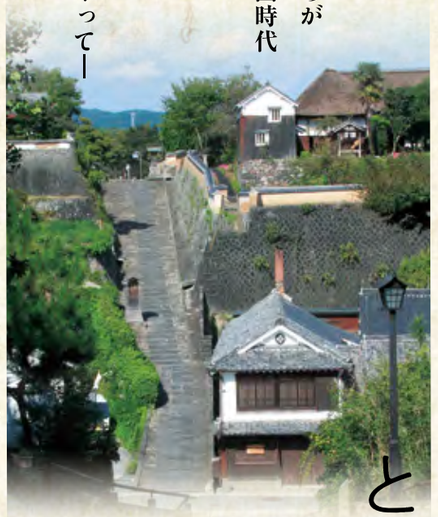
800年前の荘園の姿を守りながら、今も変わらずここでは農業が行われ、里人の暮らしが引き継がれている。

近世

天下統一を目指し
名だたる戦国武将たちが
乱世を駆け抜けた戦国時代
そのころ
都から遠く離れた
豊前・豊後にあった
3つの藩の物語をめぐって―

ときめく坂の乙女旅

ここは杵築藩
松平家3万2千石の”坂“の城下町
ここにあるのは
人情味あふれる心づくしの江戸の粋


酢屋の坂。北台・南台武家屋敷をつなぐ坂。杵築で一番美しい景観が望める。

北台武家屋敷の酢屋の坂から志保屋の坂を眺める。

近世 坂の城下町 杵築

坂の城下町には着物が似合う

国東半島の入り口、守江湾が表玄関となる杵築（きつき）の城下町。杵築藩は、古代で登場する両子寺とも強い結びつきがあったという話も聞いたことがある。「杵築の城下町を歩くと女子力がアップするから、一度行ってみるといいよ。」そんなことを友人から聞いた。なんと、着物で町歩きができるというのだ。着物を来て歩く江戸時代なら…行ってみたい！

そう思い立って杵築へ訪れた。町娘になるための準備は何もいらない。着物レンタルの「和楽庵（わらくあん）」へ行けば、着付けまでしてくれる。たくさんの柄・色から迷いに迷って、上品な紺地に小花をあしらった着物を選んだ。「夕方まで、着物姿でたっぷり町歩きを楽しんでくださいね。」スタッフの方に見送られ、和楽庵をあとにする。ここから先は江戸時代、入り口は「志保屋（しおや）の坂」だ。

お江戸文化を訪ねて

志保屋の坂で出迎えてくれたのは、杵築ボランティアガイドの江藤さん。「なかなかべっぴんに仕上がりましたね！」着物姿をほめてくれた。ユーモアあふれる元気な笑顔で、どんなところを案内してくれるのか、心が弾む。

杵築の城下町は、杵築城を中心に、南北の高台に造られた武家屋敷が、その谷間にある商人の町を挟んだ形になっている。その形状がサンドイッチに似ていることから「サンドイッチ型城下町」と言われている。坂道の上からの景色は、まさにその通りで、城下町が立体的に見える。サンドイッチ型とは実にうまく言ったものだ。

杵築ボランティアガイドの江藤妙子さん
モットーは「時にはまじめに、基本は冗談を交えながら。」ガイド歴半年だが、大原邸、佐野家と、城下町に勤めて10年になるというから、細かなところにも詳しく、かつ流暢な説明は必聴。

志保屋の坂を下り、向かいの酢屋の坂を上ると、上級武士の屋敷が立ち並んでいた北台武家屋敷通りへとつながる。杵築の坂道は、武家屋敷と商人の町を結ぶため、20数個の坂があるという。

「私のおすすめの場所が、こちらの大原邸です。」回遊式庭園を備える、敷地面積65坪という広さの家老屋敷に着く。「長屋形式の門があって、門番（ちゅうばん）さんや中間さんの部屋、馬小屋があるというのが、身分の高い武士が住んでいたということなんです。必殺仕事人で出てくる家も、こんな感じですよね。」江藤さんのしっかりとした口調に冗談まじりの解説が粋に聞こえてくる。

出入口の取っ手を見ると、障子に松の枝が挟まっていることにふと気が付いた。「主人やお客様を迎える入口でね。旦那さまのお帰りを待っています、という意味で、ここに〝松〟が入っているんですよ。」大原邸には、そんな「江戸しぐさ」という文化が屋敷の至るところに残っている。夫を立て、妻はつつましく、また質素倹約に努めた江戸の暮らしには、たくさんの工夫が施されていた。さりげない心遣いにあふれている大原邸は、現代の人たちが忘れかけているいろんなしきたりを教えてくれる。

大原邸を出て、酢屋の坂を下る。その時初めて気が付いた。着物に慣れてきたのもあるが、不思議と歩きづらさがない。坂の傾斜も石段の高さも、江戸時代の町人たちの歩幅に合わせた造りだからだ。着物姿で歩けば、不思議といろんな発見がある。

上級武士や家老の屋敷が立ち並ぶ「北台武家屋敷」。
今でも江戸時代の香りが漂ってくる。

北台武家屋敷の中でもひときわ目を引く「大原邸」。江戸時代、お客様が訪れた時に通されていた座敷からは、優雅な回遊式庭園が眺められる。

町家界隈に下り、5分ほどのところにある「お茶のとまや」へ。「おかみさんからお茶の淹れ方を習うと、女っぷりがあがるのよ。」江藤さんにそう言われながら店内へ。

とまやは280年続くお茶屋で、この町で一番古い商家。江戸時代の茶壷や100年前の手づくりガラスなど、貴重な品々が所狭しと並ぶ。「煎茶の熱いの、淹れますね。うちの茶園で摘んで、10代目の当主が作っているお茶なんですよ。」そういって、おかみさんが杵築羊羹と一緒に出してくださった煎茶。愛情がたっぷり注がれた、じんわりと心にしみる味。こんなに美味しいお茶が淹れられたら、株は上がるに違いない。お茶の淹れ方をじっくり習いにまた来たい、そう思いながら、とまやを後にする。

お茶のとまや今村孝子さん。お茶の作法はもちろん、代々続くお茶屋の歴史、杵築のお話、さまざまなことを教えてくれる。とまやでは茶道体験もできる。

「現代の十分すぎる暮らしに感謝する気持ちを杵築の町は気付かせてくれる。ガイドはまだ新米だから、多めにみてね。」そう言いながらも、歴史を語る時は、きりっと引き締まるところは、やはりプロだ。おちゃめな江藤さんに癒された、杵築お江戸散策。先人たちの残した大切な〝もの〟を見て歩き、着物に身を包んで歩く時間は、つつましやかな乙女になれる魔法にかかったひと時。「次はどんな柄の着物を着ようか」、気付けばすでに次の計画へと思いを馳せていた。

見どころ

和服姿で城下町散策！

南台武家屋敷の和楽庵（中根邸）では着物のレンタル&着付けを2,000円で行っている。
着物姿で町を歩くと、杵築城や武家屋敷などの入場が無料になったり、市内約30店舗でうれしい特典も。【要予約】

問 杵築市観光協会
☎ 0978-63-0100
所 和楽庵　杵築市南杵築193－1
休 12/28～1/3

問 杵築市商工観光課
☎0978-62-3131
http://www.city.kitsuki.lg.jp

ボランティアガイド
杵築城下町散策
杵築市観光協会
☎0978-63-0100
実施日／毎日（7日前まで要予約）
費用／無料（ただし別途施設入館料が必要）

情熱と愛情 小さな藩のバイタリティー

近世2つ目の城下町、中津

お札に載るほどの人物を育んだこの地に受け継がれる学問への熱い思いを訪ねて―

近世 学びの城下町 中津

福澤諭吉の志を知る

「今日はわざわざ中津までお越しいただき、ありがとうございます。」ていねいなあいさつで迎えてくれたのは、『中津郷土史を語る会』の宇都宮泰子さん。「中津は、福澤諭吉先生ゆかりの地であり、医学に熱心だった蘭学の里として大きく発展した場所なんです。」どんなものがこの中津に残っているのだろう。まずは福澤諭吉旧居から、学びの町歩きが始まった。

福澤諭吉は、豊前国中津藩下級藩士の次男として天保5年（1835）に生まれた。66年の生涯を、江戸・明治の日本文化が急速に進んだ時代に生きた人である。

中津郷土史を語る会メンバーの宇都宮泰子さん。まるで紙芝居を見ているような語りが魅力。思い立ったら直接聞きに行くという勉強熱心な行動派である。

当時の社会を教育で変えようとした啓蒙思想家だ。漢学を礎に、長崎で蘭学を、その後時代の流れに沿ってさらに英語も学んだ。「天は人の上に人を作らず」という言葉が有名だが、福澤諭吉の人となりには、母の存在が大きかったという。「諭吉先生のお母さんは、分け隔てなく誰にでも平等に接していました。また、諭吉先生が勉強をしたいと言えば、家財を売り払って学校に行かせたそうです。そういった姿が諭吉先生の人格を育んだのでしょう。」“諭吉先生”と敬意を持って説明する姿が、またその思いを膨らませる。隣接する記念館では、福澤諭吉の生涯を詳しく知ることができる。「次の時代を切り開くのは学問の力だと、諭吉先生は見据えていたんです。先生が創立した慶應義塾大学の校章もペンをモチーフにしているでしょう。」『ペンは剣より強し』、まさにそれが福澤諭吉の志の象徴だ。

福澤諭吉旧居

塾生たちに囲まれる福澤諭吉

漢方から蘭方へ、先進的な医学への取り組み

もろもろの職人の家が立ち並んでいたことから「諸町」という名が付いたと言われる通りに、「村上医家史料館」がある。寛永17年（1640）の開業から370年以上今も続く医家で、数千点に及ぶ医学関係の資料が残されている。ここのスタッフに話を聞く。「特に7代目の村上玄水先生は、九州で早い時期に解剖を行いました。漢方を主流にしていた時代から西洋医学へと移り変わった大きな節目ですね。自分だけでなく、この辺一帯の医師の意識改革、蘭学を奨めるという思いで、日々医業に携わっていましたが、そこには、藩主の大きなバックアップがありました。3代目奥平昌鹿（まさか）公、5代目昌高（まさたか）公なくして中津の学問を語ることはできませんね。」なぜ藩主たちが蘭学に力を注いだのか、それを知るために中津城へと進む。

村上医家史料館

日本科学史のトビラを開いたハイカラ藩主

中津城は、天正15年（1587）に九州平定を終えた豊臣秀吉の天下取りを一番近くで支えた名軍師・黒田官兵衛がこの中津へ配置され、名軍師から城持ちの殿様になった城である。初めて城主となった官兵衛が、国づくりをする中で天下統一をもくろんでいたと思われる足跡として、九州最古の近世城郭、高度な技術で造られた石垣が現存する。

城内では、享保2年（1717）から城主となった奥平家の資料を多く展示している。ここでは中津城の金尾信二さんに案内をお願いする。

入ってすぐ右手に、立派な鎧（よろい）が並ぶ。「これは江戸後期の当主だった蘭学大名で有名な奥平昌高公の鎧。島津・奥平の家紋が入っていますね。」3代目の昌鹿が蘭学を奨励し、当時中津藩医であった前野良沢が、杉田玄白とともにオランダ語の医学書『ターヘル・アナトミア』を翻訳した『解体新書』の刊行を支援した。また5代目の昌高は、自身も蘭学者であり、のちに家臣に命じて日蘭・蘭日辞書を編纂発行している。村上玄水に解剖許可の英断を下したのも昌高である。

天守閣からは中津城下が一望でき、由布岳や姫島も見渡せる。なぜ奥平家は蘭学を支持したのか、金尾さんに尋ねた。「今で言う最新技術である蘭学を取り入れ、藩の発展につなげたいという思いがあったんでしょう。昌鹿公の母親が骨折した際、蘭学医が治したという話もあるんですよ。」

九州の大きな藩に囲まれる中で、わずか10万石の譜代である奥平家は、非常に学問を重んじた。時代を切り拓いた学問の系譜を持つ城下町が教えてくれたのは、努力することへのかけがえのない熱い思いだった。

400年前の近世城郭でこれだけの状態のものが残っているのは中津城の石垣のみといっても過言ではない。「石の行きたいところへ行かせる」を極意とする「穴太（あのお）積み」と呼ばれる積み方で、安土桃山時代に石垣造りを得意とした「穴太衆」と呼ばれる人たちが用いた技法で造られている。

寺町にある合元寺。中津城を築城した黒田家に謀殺された宇都宮鎮房の家来が奮戦した場所。その後何度壁の色を塗り替えても血のあとが現れるため、赤く塗り替えたと伝わる。

寺町にある「鍵の手」という交差点は、交差点がずれ外部からの侵入を阻むよう、馬が直線を駆け抜けることができないような造りになっている。

問 中津市観光課
☎0979-22-1111
http://www.city-nakatsu.jp

ボランティアガイド
城下町中津史跡めぐり
中津耶馬溪観光案内所
☎0979-23-4511
実施日／毎日（要予約）
費用／無料（ただし別途施設入館料が必要）
予約／1週間前までに必要

見どころ

栗山堂

黒田二十四騎の栗山利安ゆかりの300有余年続く和菓子屋。懐かしく優しい味わいのういろうが代表的で、菊型で作られるのが特徴。☎0979-22-0820
所 中津市京町2丁目1521

むろや醤油

塩水を使わず、独自の製法で醸造された醤油は、古くは小笠原公・細川公・奥平公と代々中津藩主に献上。今でも手詰めでていねいに作られている。
☎0979-22-0207 所 中津市諸町1830

かつて森鷗外もこの景色を眺めた。春は海のブルーと桜のピンクのコントラストが格別。

近世 海の城下町 日出

潮風香る城跡さんぽ

城壁の狭間から聞こえる、さざ波の音
目に映る果てしなく続く穏やかな別府湾は
青く輝く豊穣のきらめき

豊臣家ゆかりの海辺の城

別府市の隣町に小さな城下町があることをご存じだろうか。ここは、大分県を代表する天下の美味「城下かれい」で知られる日出町。「日出」と書いて「ひじ」と読む。

3つ目の城下町を案内してくれるのは、「ひじまち歩きガイドの会」の渡邊睦子さん。待ち合わせをした「二の丸館」は、休憩スペースや特産品コーナーがあり、さらに、日出城の裏門を守るために築かれた櫓が復元されている。日出城下の雰囲気を醸し出す、町歩きの中心にぴったりの場所だ。「絶景の広がる城下町を、ゆったりとご案内しますね。」渡邊さんの優しい歓迎に心が和む。

「見どころは、なんといっても日出城趾です。」渡邊さんが案内してくれたのは、二の丸館のすぐそばにある小学校の前。「日出城は、別名・暘谷城とも言われ、今は跡地となっています。ご覧の通り、今は小学校なんです。」

慶長6年（1601）初代藩主である木下延俊が、三万石の大名として姫路から日出へ入国した。延俊は、豊臣秀吉の正室・ねねの甥である。延俊の入国後築城にかかり、翌年完成。城の設計は、義理の兄で当時中津藩主だった細川忠興が行った。延俊は豊臣の近親にもかかわらず、関ヶ原の戦い後、家康からなんのおとがめも無かったのは、家康の信頼が厚かったねねと、忠興の計らいがあったからと伝えられている。

日出城は、三層の天守閣が別府湾に臨む一角に築かれ、小藩の城とは思えないほどの規模と高い完成度を誇る、調和のとれた美しい城だったといわれている。城主もこの景色に惚れ込んで、ここに城を建てたに違いない。別府湾の大パノラマを目の前に、日出城があった場所で子どもたちが勉強しているのかと思うと、なんとも贅沢な環境にうらやましくなる。

ひじまち歩きガイドの会代表の渡邊睦子さん。おすすめは日出城趾の周辺散策。自分が好きな場所でもあるので、説明に力が入るという。

日出城趾の周りは散策路になっている。海沿いには高浜虚子の句碑があり、城壁の造りをいろんな角度から眺めつつ、のんびりと歩こう。

感性を育む文教の地

城趾周辺には、格式高い門構えの家が多く立ち並ぶ。日出藩十五代藩主の木下俊程の命により創立した『致道館』（現在は修復工事中で、平成26年度末完成予定）は、大分県に現存する唯一の藩校である。「特に十五代のお殿様が学問に力を入れていました。以前は士族の長男しか学べなかったのですが、致道館では農民も商人も女性も通えるようになったのです。」学問に加えて、礼節や道徳を尊重する教育に力を注いだ。

学問つながりでは、豊後の三賢人の一人である帆足万里の墓が残っている。貴重な史料も数多く、それを目的に専門家も多く訪れる。日出町が教育熱心な文教の地だったことが見えてきた。

城下町の中でもひときわ目を引く建物がある。「ここは的山荘といって、大正4年（1915）に建てられた、馬上金山を経営していた成清博愛の別邸です。」庭を案内しながら渡邊さんが語る。的山荘は、日出の近代和風建築の代表であり、今は城下かれいを味わえる料亭となっている。贅の限りを尽くした庭からは、まるで別府湾がプライベートビーチかのよう。天気がいい日の眺望は格別だ。

ぐるりと散策して戻ってきた二の丸館の裏門前に、名曲「荒城の月」の作曲者で知られる豊後の楽聖、瀧廉太郎の像が佇んでいる。なぜこんなところに瀧廉太郎の像が…。「実は瀧廉太郎のお父さんをはじめ、その祖先は日出町出身なんです。」瀧家は代々日出藩の家老職などの要職に就いていた。「お父さんは廉太郎に日出で大工さんになってほしかったそうですが、廉太郎は音楽の道に進みたいと告げたそうですよ。」そんなエピソードがこの城下町にあったとは。日出町からは優秀な人材が多く誕生していた。

「この日出城趾の景色と、季節を感じながらのんびりとお散歩してもらいたいですね。」と渡邊さんは語る。ほかにも、宣教師フランシスコ・ザビエルが歩いた道や、『殿様街道』と呼ばれるトレッキングコース、鏝絵めぐり、風待茶屋だった港町など、ロマンある物語が残る海沿いの城下町。どこにいても潮風を感じられる、そんな爽やかな時間を季節ごとに味わってみたいものだ。次はちょっと贅沢をして、城下かれいのシーズン、5月にぜひ訪れたい。

本丸下の海岸は通称「城下海岸」と呼ばれ、周辺の公園内に「海中に真清水湧きて魚育つ」と城下かれいについて謳った高浜虚子の句碑が残されている。

日出城趾すぐそばにある「二の丸館」。レンタサイクルでの散策もおすすめ。

日出城趾にある日出小学校の片隅にある時鐘（じしょう）は、3代目藩主・木下俊長が鋳造させたもの。今でも毎朝8時に小学校の児童たちが当番で鐘をついている。鳴り響く元禄の鐘の音は、大切に受け継がれている。

見どころ 城下かれい

日出城下の別府湾に湧く真水と海水が混じる水域で育ち、臭みがなく淡白で上品な味わいの逸品。毎年5月の中旬には「城下かれい祭り」が開催される。

問日出町商工観光課　☎0977-73-3158

問日出町商工観光課
☎0977-73-3158
http://www.town.hiji.oita.jp

ボランティアガイド
ひじ ふれあいまち歩き
日出町観光協会
☎0977-72-4255
実施日／毎日（要予約）
費用／ガイド1人につき1,000円
（ただし別途施設入館料が必要）

近代

今から少し前の懐かしの時代へ

ようこそ地獄という名の極楽へ

全国各地に温泉あれど
別府温泉はひと味もふた味も違う
ふらりと出かければ
レトロでノスタルジーな旅がはじまる

近代 温泉文化の街 別府

湯けむりのぼる、おもてなしの町別府

JRで別府駅に降り立つ。電車の扉が開くと同時に、「べっぷ～、べっぷ～」と、全身の力が抜けるようなアナウンスが聞こえてくる。改札口を出ると、観光案内所の前に「竹瓦かいわい路地裏散歩」の案内板と、ハッピ姿のガイドさんの姿が見えた。まるで孫の里帰りを待っていたかのように、「よぅ来たね。」とガイドの矢島嗣久（つぐひさ）さんが出迎えてくれた。

「別府は、北と南にある断層によって温泉が分かれています。場所によって温度や泉質がそれぞれ異なる8つの温泉郷があり、その温泉地を総称して『別府八湯（べっぷはっとう）』と呼んでいるんですよ。」別府温泉は、雄大な鶴見山麓に広がる扇状地にあり、世界一の源泉数と世界2位の湧出量を誇る、全国でも有数の温泉地。別府八湯の共同浴場の数は100以上。青、赤、白などのカラフルな温泉や蒸し湯、泥湯など、泉質や入浴方法もさまざまだ。

バスターミナルに出ると、ひらりとマントを身にまとった銅像が立っている。「この方は油屋熊八（あぶらやくまはち）と言って、別府の名を全国に知らしめた、別府観光の父です。」油屋熊八は、日本初の女性バスガイドを発案し、昭和初期に観光バスで「地獄めぐりツアー」を始めたり、富士山頂に"山は富士、海は瀬戸内、湯は別府"という宣伝塔を立てたり、徹底したサービス精神と、斬新なアイデアで別府のPRに尽力した人物だ。「明治4年に楠港ができ、関西から大勢人がやってきました。そして明治33年にチンチン電車が走り始めて北九州の文豪、森鴎外も別府で初めて乗ったと記録が残っています。交通の便が良くなったことや、熊八さんのおかげもあり、たくさんの旅行客でにぎわっていたよ。」と、まるでその場を見てきたかのような口調で話す矢島さん。

細い路地を行ったり来たり

別府駅から海側へと歩く。「別府の温泉には、お薬師さんかお地蔵さんが必ずそばにあります。温泉の恵みへの感謝と、健康を祈ってね。近所の人たちが大切にしているんよ。」そんな話を聞きながら、モダンな温泉の前で足を止める。「ここは駅前高等温泉。大正13年（1924）に建てられた珍しい洋風建築の共同浴場なんです。」ドイツなどで見られるレンガや石を詰めたハーフティンバーという様式だ。

狭い路地を渡り歩く途中、「もう少ししたら、日本一の温泉が見えてくるから、見逃さんようになぁ。」矢島さんからそう言われて歩くも、まんまと通り過ぎる。「ここですよ！ 日本一狭い路地裏にある、梅園

「ようこそ!」と両手を広げて大歓迎する油屋熊八の姿は別府駅前で見られる。

定期観光バスに美人車掌を乗せ、七五調で案内する油屋熊八のアイデアは、爆発的な人気を呼んだ。

写真提供：平野資料館

「別府八湯語り部の会ボランティアガイド部会」の矢島嗣久（つぐひさ）さん。得意分野は別府の郷土史。70代というご高齢ながら、しっかりとした足取りで案内する。ガイドに参加するともれなく矢島さんのブログに参加の記念写真をアップしてもらえる。

朝は目覚めのひとっぷろ、夜は一日の疲れを流す。別府市民は朝から晩まで温泉三昧だ。風呂桶片手に近所の共同湯に行くのが日課。

散策途中、休憩でおやつもいただける。こちらは塩月堂老舗の「ゆずまん」。

温泉。」お昼から翌朝0時45分まで、100円で入れるという。「別府の温泉88カ所入ってスタンプを集めると、温泉道名人になれるスタンプラリーがあるけん、やってみるといいよ。」名人は現在4500人を超す。湯巡りにもそんな楽しい遊び心が組み込まれている。別府市内だけで88カ所もめぐれるというから、さすがは湯の町別府である。

明治31年（1898）に開業の、かつて別府を代表する温泉旅館だった「旧冨士屋旅館」。入母屋造りの式台付玄関や、本格的な書院造りの客室が残り、現在はギャラリーとして今もその姿をとどめる。

戦火を免れた竹瓦界隈には、レトロな町並みが今でも残っている。明治時代に東京で流行した看板建築で造られた松下金物店や友永パン。明治43年（1910）創業の長寿味噌は手作りを守る味噌屋で、湯布院の旅館からも引き合いがある。大正時代最古のアーケード、アールデコ風のしゃれた洋風建築物など、見どころ満載でいくら時間があっても足りない。温泉の素晴らしさもさることながら、路地裏にレトロなアートの世界が詰め込まれている。

矢島さんとの別れ際、お昼ご飯のオススメを聞いてみると、「せっかくやけん、鉄輪（かんなわ）温泉の『地獄蒸し』を食べていきよ。」と薦めてくれた。

別府駅から車で15分程のところにある鉄輪温泉。ここには「貸間」と呼ばれる湯治宿が狭い路地に建ち並び、温泉の噴気で野菜や海鮮などの食材を蒸し上げる「地獄蒸し」が体験できる。好きな食材を選び、それを網にのせ、自分で地獄釜にセットする。海鮮はプリプリ、野菜はホクホク、鶏肉はほろほろと身がほぐれていく。何も味付けをしないのに、蒸したての地獄蒸しは、ほんのりと温泉の塩味。こんなに旨みが増すのか、と驚くほど、素材それぞれの味を引き立たせている。温泉成分が隠し味のヘルシーな料理だ。

お昼ご飯の後は、周辺の鉄輪散策。そして昼よりもっとディープな、夜の竹瓦路地裏散策へと誘われる。

夜の竹瓦散策

ネオン街の夢のまにまに

金曜の夜8時半。竹瓦温泉の前に少しずつ人が集まり始める。「はっちゃんぶんちゃん」に会うために。「夜の路地裏散歩」は、流しのはっちゃんぶんちゃんが奏でる懐かしの昭和メロディーにのせて、夜の路地裏を練り歩く、別府名物の一つだ。ぶんちゃんは別府のネオン街を流し続けて50年。御年80歳、この界隈で知らない人は誰もいない。はっちゃんは2代目に引き継いだ。県外のお客さんが多く、一度参加すれば二度、三度とやみつきになってまた来てしまうという人も。

「ようこそ、夜の竹瓦へ」と優しい笑顔で出迎えてくれたのはガイドの平野芳弘さん。「夜の路地裏散歩に参加するために、旅行プランを合わせて来る方が多いんですよ。今日はゆっくり楽しんでいってくださいね。」

竹瓦小路の奥から、ギターとアコーディオンを弾きながら、主役の二人が登場。「心に響く流しの演奏を聞きながら、夜の竹瓦ネオン街を歩きます。」平野さんの案内でスタートする。

まずは竹瓦温泉へ。ママさんガイドの岸川さんが七五調で竹瓦温泉の解説をしてくれた。「ここは名高き竹瓦　天然砂湯は日本一　メインストリートの路地裏に　温泉スナック軒並び　夜は10時まで入れます～」「お湯の熱さも日本一　地獄極楽感じつつ　寺院造りの建物に　朝は、はよから6時半　たった100円入れます～」岸川さんの鈴の音のような声に、絶妙な間で別府音頭をはっちゃんぶんちゃんが歌いだす。レパートリーは5500曲。リクエストすればすぐに曲が出てくる、まるで人間ジュークボックスだ。

竹瓦温泉から斜め前に見えるレトロな建物に、なにやらクラシックなファッションの人たちがひっきりなしに入っていく。その先にはどんな世界が広がっているのだろうか。

眩しく輝くオールディーズのステージ

扉を開くと、熱気があふれだし、どこかで聞いたことのあるオールディーズのメロディーが大音量で耳に入ってくる。客席へと進むその歩みは、自然とリズムを刻んでいた。「ビーナス」「ロコモーション」など50～60年代のアメリカンポップスのヒットナンバーが続く。客席は満席で、ステージの最前列には、ばっちりと衣装を決めた常連客が陣取ってステップを踏んでいる。目の前に映る光景と、タイムトリップした音楽と、そこはもう、別世界。体の奥深くで眠っていた何かが、覚醒した瞬間だった。

店を出る頃には、踊りたくてうずうずしている。ただ手拍子しかできなかったことを後悔しながら、次来るときは踊りたい！と後ろ髪を引かれる思いでお店を後にする。

懐かしさと温かさに、また会いたい

ヒットパレードクラブを出て路地を進み、昼間通った梅園温泉の前に通りかかる。細い路地の奥に小さな蛍光灯がぽんやりと見え、昼と夜ではまったく風景が違って見える。

あたりに妖しいネオンが灯る夜の路地裏には、歌謡曲が良く似合う。はっちゃんぶんちゃんの歌声が聞こえると、飲み屋のママたちがお店の外に出て、温かく迎える。狭い路地を、肩を寄せ合って歩く。人と人との触れ合いが感じられる、この距離感が何とも言えない。「地元の人たちみんながはっちゃんぶんちゃんの魅力に引き込まれ、応援したくなる。住む人も、訪れる人もお二人から元気をもらえるんです。私にとってもやりがいにつながっています。」平野さんが嬉しそうに語る。参加した人たちの高揚した表情を見れば、その言葉の意味が良く分かる。

路地裏で聞いたアコースティックサウンド、オールディーズのリズム、みんなの笑顔…この不思議な一夜は、夜の路地裏散歩でしか知ることのできない感覚だ。

ずっとこの楽しい気分でいられたら…。どうかこの心地よさが覚めないでほしい、ふわふわと夢見心地の足取りで、温泉宿への帰路に着く。

八坂通りではお客さんが参加して流しの演奏で歌を一緒に歌う。リクエストも大歓迎。手拍子、合いの手に、歌う方もさぞ気分がいいことだろう。

ボランティアガイド平野芳弘さんは、ガイド歴10年以上のベテラン。大正から昭和初期にかけて作られた別府の観光ポスターなど自らのコレクションを展示する「平野資料館」の館長を務める。

見どころ

別府八湯温泉道

別府八湯の温泉を88カ所めぐり、「スパポート」にスタンプを集めると、「別府八湯温泉道名人」の称号を得ることができる。
スパポート販売場所▶JR別府駅の観光案内所・別府市観光協会で100円で販売中。

問別府市観光課
☎0977-21-1111
http://www.city.beppu.oita.jp

ボランティアガイド
別府八湯ウォーク（14コース）
㈳別府市観光協会
平日 ☎0977-24-2828
土・日・祝 ☎0977-24-2838
実施日／コースにより異なる
費用／コースにより異なる

近代 昭和の街 豊後高田

変わらなくて、よかった 懐かしの思い出さがし

目を閉じれば、よみがえる
にぎやかで、温かかった日々
みんなが同じ思いで生きたあの頃へ
おかえりなさい

昭和30年代の古き良きあの頃へ

家族みんなで食卓を囲み、お隣さんとの仲も良く、近所の子どもたちは空き地で野球をし、窓ガラスを割って怒られ…。まるで漫画「サザエさん」の世界だが、そんな日常が〝昭和らしさ〟である。昭和30年代は、電化元年と言われ、テレビや電気洗濯機などの家電製品が世の中に広まった。少しずつ便利な世の中になり、日本の生活スタイルが変わり始めた時代だ。

国東半島の西側にある豊後高田市に、その昭和から時が止まったような商店街があるという。その名も「昭和の町」。

昭和の町を一日案内してくれるのは、モンペ姿がトレードマークの、町歩き案内人『みねちゃん』。「私の思い出が詰まった昭和の時代をご案内しますね。」元気なみねちゃんは、久しぶりに会う親せきのような親しみのあるお姉さんだ。

町歩き案内人『みねちゃん』こと河野峯子さん。この昭和の町が立ち上がる平成15年（2003）に声がかかり、ガイドに。元バスガイドさんらしい、元気をくれる楽しいガイドにファンが多い。

目と目を合わせ、心が通う昭和のあきんど

江戸時代から昭和の30年代にかけて、豊後高田の中心商店街は、国東半島一のにぎやかな〝お町〟として栄えた。その当時の姿を再現した「昭和の町」は、豊後高田市の中心にある総延長550mの商店街。当時から値段が変わらない食堂や、鮮魚店、薬局などが並び、昭和の面影を残す。

まず最初に足を運んだのは、新町1丁目にある「千嶋茶舗（ちしまちゃほ）」。大正11年創業で、5代目のおかみさんが切り盛りする。「継ぐつもりなんてなくてね。この昭和の町があったから、続いているようなものなんです。」おかみさんが冗談交じりに話す。店の入り口には、大きな茶箱と茶筒が置かれてある。「昭和初期に京都から貨車いっぱいに宇治のお茶が運ばれていた頃のものなんです。『一店一宝』といって、昭和の町の商店では、店それぞれにある昭和のお宝を展示しているんですよ。」店ごとに違ったお宝に出会えるのが昭和の町の楽しみ方の一つだ。

新町2丁目に向かって進むと、コロッケを片手に歩く人をちらほら見かける。元をたどると、精肉店の「肉のかなおか」に着いた。肉をさばく人、惣菜を作る人、接客をする人、あわただしく作業する姿がショーケース越しに見える。パックに詰めた商品が並ぶのが当たり前の平成の時代に、待ち時間にこんな作業風景が見えるというのがまたいい。近所の常連さんが「いつもの、500gね。」と注文をする傍らで、旅行客らしきお客さんはコロッケ選びに熱心だ。「おかげさまで、コロッケが人気でね。」ご主人いわく、多い時で週末に1000個出る日もあるという。売れ筋は和牛コロッケ、ご年配の方にはおからコロッケが人気だ。

店内がお客さんでいっぱいになったので、次のお店へ。甘い香りに誘われて、「杵や」に入る。紅白饅頭や、おかがみさんなど、行事ごとになくてはならないお餅を作るお店だ。甘い香りは、入口の所で焼いている「そばせんべ」だった。「豊後高田は蕎麦の産地でね、そば粉を使ったお菓子が人気です。お一ついかがですか？」一口食べると、ふわっと蕎麦の風味が広がった。

「杵や」の斜め前に「もりかわのキャンデー」と書かれた箱があるのが気になり、その店をのぞいてみる。森川豊国（ほうこく）堂は、大正8年から続く和菓子屋で、夏はアイスキャンデーがよく出る。立ち寄った人のために、そっと椅子が置かれてある。近所の人が自転車で来た時には、タイヤの空気を入れたり油を差すこともあるという。「お客さんとの触れ合いが楽しみで

1.千嶋茶舗の人気は、昭和当時と同じ紙の茶袋に入った玄米茶。近所の人たちは、昔から変わらずここへ玄米茶を買いに来る。「懐かしいでしょ、この包み。一袋300円、二袋買っても600円です、よろしくお願いします。」と、みねちゃんの説明も熱が入る。
2.「杵や」の地元産の蕎麦粉やピーナツを使った豊後高田銘菓は絶品。
3.味のある看板が目印の「森川豊国堂」。大人気のアイスキャンデーをほおばれば、みんな子どもの頃の顔に戻る。
4.「やっぱり喜んでくださる笑顔を見られれば、それがなによりですね。」とほほ笑む「肉のかなおか」店主。

ね。用事がなくても立ち寄ってくれるんよ。」3代目のご主人がそう話す。細かな気遣いだと感心していたことが、この商店街ではサービスではなく、コミュニケーションの一つだと考えている。昔ながらの対面販売には、店同士のつながり、お客さんとのつながり、人と人とのつながりを実感できる"絆"がある。

「昭和の真っただ中を生きた人たちがここへ来ると、『涙が出そうだった』と感激する方もいます。昭和に戻れて嬉しかったね、と言ってもらえたら私はそれだけで十分。」みねちゃんが笑顔で語る。「商店街の中に、大寅屋食堂っていう店があってね、安くてお腹がいっぱいになれた。昔は給料日前なんかはよくお世話になったものよ。そんなことが幸せだったね。」しみじみとつぶやいた。

「カフェ&バー　ブルヴァール」は、昭和の町散策と中の休憩にぴったり。給食後のコーヒーも美味。

人生の思い出を探しに

商店街をまわり終えるころ、お腹も空いたのでお昼をとることにした。「給食が食べられる喫茶店にぜひ行ってみて。」みねちゃんの紹介で立ち寄ったのは、一昔前の雰囲気の「カフェ&バー　ブルヴァール」。メニューの中から、一番人気の給食のセット、揚げパンとクジラの竜田揚げ、脱脂粉乳を選んだ。シンプルだけど優しい、なぜかほっとする味。店主の野崎さんと話す。「こんなふうに初めての方と話すのが楽しい。10年後、20年後もそのまま変わらず、商店街のみんなでやっていきたいね。一人じゃないから。」そんなふうにカウンター越しに語ってくれた。

昭和30年代は、貧しい中でも明るい未来を信じて、みんなで助け合いながら生きていた。平成の今、いろんなことが豊かで便利になったが、昭和30年代は幸せが実感できた。みんなが毎日を一生懸命生きていた昭和のスタイルが続くこの町には、変わらなかったから、よかったことがたくさんある。新しいものを追いかけるだけではなく、持っているものを守りたいと願う気持ちは、どの時代を生きた人たちも、同じ思いだったであろう。

永い永い、時の旅。ふと気が付くと、ここで出逢った場所、人、時間、すべてが心にそっと寄り添い支えてくれる、愛おしい存在になっていた。

時の旅は、終わらない。過去を知ることで、それぞれの人生を見つめ直し、そして新しい記憶を、これからも刻み続ける。

見どころ

昭和ロマン蔵

明治から昭和にかけて大分県きっての大金持ちといわれた野村財閥「旧高田農業倉庫」の建物に昭和のお宝が詰まっている。お菓子が並ぶ「駄菓子屋の夢博物館」や、昔の暮らしを再現した「昭和の夢町三丁目館」で昭和を体感できる。

0978-23-1860　所 豊後高田市新町

ボンネットバス「昭和ロマン号」でタイムスリップ

昭和32年式のレトロなバスに乗って、バスガイドさんの案内とともにめぐる周遊バス。昭和の町だけでなく、富貴寺や熊野磨崖仏をまわる「国宝探訪コース」や「海辺満喫コース」など、無料で楽しめる。（昭和ロマン蔵から出発）

0978-22-3100（豊後高田市観光協会）

問 豊後高田市観光まちづくり株式会社
☎0978-23-1860
www.showanomachi.com

ボランティアガイド
町歩き案内人
豊後高田市観光まちづくり株式会社
☎0978-23-1860
実施日／毎日（インターネットのFAXご予約フォームより要予約）
http://www.showanomachi.com/yoyaku/
費用／ガイド1人につき2,000円
（ただし別途施設入館料、駐車料金が必要）

狭い通りを走りぬけるボンネットバス。中から見える景色も何もかも、本当に昭和に戻ったような気持ちになる。昭和の町のボンネットバスは、本物のタイムマシンなのかもしれない。

千年ロマングルメ

この味に逢いたい

県北地域の自然と人が育み、愛されてきた食がある。長い時間の中で守られ、そして磨かれてきた味は、ただ空腹を満たすだけではない豊かさが満ちている。ほかでは決して体験できないオリジナルの味とストーリーを巡りに出かけよう。

来々軒　福田安洋さん

宇佐からあげ

今やレ人気は全国区！「からあげ」専門店発祥の地の実力。

中津・宇佐を代表するご当地グルメ、からあげ。若鶏のからあげの元祖、宇佐市の「来々軒」では、鶏肉の旨みを大事にするため、漬け込むタレは醤油とニンニクをベースしたシンプルなものだ。シンプルだからこそ、冷めても柔らかく美味しくするための独自の技がある。下処理や漬け込む時間、調味料のブレンドももちろんだが、店主の福田安洋さんは油に厳しい。注ぎ足しをせず、常に新鮮な油で揚げることで、いくつでも食べられそうな後引く美味しさに。"元祖"の看板を背負う店主の譲れないこだわりだ。

まだまだあります

千年ロマングルメ

【中津からあげ】

「専門店発祥の地」宇佐に対し、「からあげの聖地」と呼ばれるのが中津市だ。店舗ごとに秘伝のタレなどで味付けは異なるが、どこでも揚げたてを買えるのが嬉しい。好みの味を求めて、いざ、食べ歩きに出発！

【とり天】

さっくり軽い衣に包まれた上品なおかずとして人気のとり天は、大分を代表する郷土料理。中華料理を学んだ別府の料理人が考案したことが始まりで、今では別府市内300以上の店でさまざまな味を楽しめる。

海

くにさき銀たち

太刀魚漁師　中本晋一さん

銀鱗きらめく 国東のブランド太刀魚

瀬戸内海、周防灘、そして豊後水道の潮流がぶつかり合う豊かな漁場で、春から夏にかけて揚がる極上の太刀魚。その名も「くにさき銀たち」は、針のついた糸を手繰り寄せるはえ縄漁で釣り上げる。妻、長男と親子3人で営む親子船の出港は真夜中。中本晋一さんはこの道60年の経験で身についた感覚を駆使して場所を見極め、暗い海に針を落としていく。キラキラと波間で輝くシルバーの魚体を傷つけないよう箱詰めし、市場へ直送。肉厚で脂がのり、姿の美しい銀たちは福岡でも評価が高く、国東の漁師たちの誇りになっている。

【くにさき姫だこ】
潮流の激しい伊予灘で育ち、身が引き締まった「くにさき姫だこ」は、身が引き締まり、噛めば噛むほど旨みが出てくる美味しさ。刺身だけでなく、から揚げや炊きこみご飯など、味わい方は多種多彩。

【岬ガザミ】
大きくて甘みのある身がぎっしり詰まったワタリガニで、特にメスは卵を抱える冬（11月～12月）が最高の時期で抜群の味わい。塩ゆでがシンプルで一番美味しい食べ方で、カニみそや内子も一緒に楽しめる。

麺

豊後高田そば

地産そばの うまさを引き出す、職人の心意気

そばの産地、豊後高田市に「十割蕎麦ゑつ」を構える河野江津夫さんは、寡黙にそば粉と向き合う。地元の畑で育てられた無農薬のそば粉の繊細な風味、そしてのど越しを追求すれば、「三たて」（ひきたて、打ちたて、茹でたて）に行きつくのは当然のこと。良質な粉を使って最高な状態で供するのが信条だ。声高にこだわりを叫ばず、当たり前のことをただ当たり前に行う姿が潔く、職人の心意気がうかがえる。つなぎを一切使用しない十割の美味しさを堪能できる、そば好きのための店だ。

十割蕎麦ゑつ　河野江津夫さん

【本耶馬渓地そば】
中津市本耶馬渓町産のそばを昔ながらの方法で粉にしたこだわりの味。そばラーメンやそばスイーツなど、さまざまなアレンジのそばも楽しめる。冬に開催される「新そばフェア」ではとれたてのそばを味わえる。

【別府冷麺】
朝鮮冷麺をベースに、別府市で独自の進化を遂げた別府冷麺。和風のダシに、太めで弾力のあるモチモチした麺と、中細麺でツルツルとのど越しのいいタイプの2種類あり、それぞれの店で味付けやトッピングが異なり飽きない。